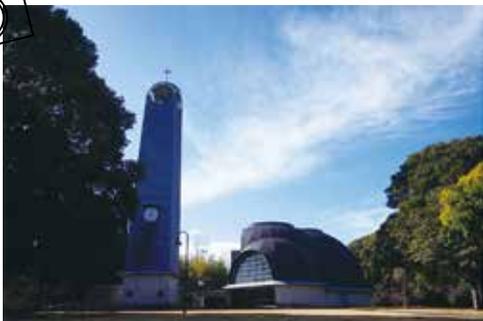


住みよさ実感

千葉ニュータウンの美しい景観に 森の中のチャペルの鐘が響く



広報レポーター
宇野建夫(小倉台)



▲木々に囲まれ静かに建つチャペル



▲東京芸術劇場のオルガンも手掛けたマルク・ガルニエ作のパイプオルガン

千葉ニュータウン中央駅南口を出て、ニュータウン大橋から県立北総花の丘公園の緑豊かな遊歩道を南にたどると、途中に東京基督教大学の正門が見えます。このキャンパスの森の中に、昨年末他界された世界的建築家、磯崎新氏設計によるチャペルが祈りの場として建っています。外観は三つの球が体を寄せ合い、せめぎ合っているような独特のデザインで、隣に建つ天空に向かう鐘楼が、何か強い意志を感じさせます。

「このチャペルは建築士であった本学学生の提案で、当時ポストモダンの旗手といわれた同氏に設計を依頼し、現代世界の裂け目と希望を表現した建築です」と語る山口陽一学長。建物は3つのドームで構成され、鉄筋コンクリート造の基礎の上に、アーチ形の米松の集成材の梁で支える構造です。内部は装飾を排除した簡素な中に、平穏を感じる祈りの空間が天井高く広がります。取材当日は、年に一度の「祈祷日」で、窓から朝の光が差す中、学生や教員の讃美歌の音がチャペルの空間に爽やかに響き合い、心地よい風が心の琴線に触れました。

山口学長は「市民の皆さんと交流を図るため、今年も5月20日(土)に“公開講座パイプオルガンさんこんにちは”、12月に“クリスマスコンサート”を開催予定です。貴重な文化遺産として、このチャペルが長く皆さんに愛されるよう守っていくつもりです」と穏やかに語りました。

世界の五大陸が描かれたステンドグラス



今年度の各月の
レポートはこちら▶

